

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 2 日現在

機関番号：13101

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2015

課題番号：26580033

研究課題名(和文) 戦前期、小型映画のネットワークとその文化圏の研究

研究課題名(英文) A Study on the Cultural Network of the Amateur Film in Pre-war Japan

研究代表者

原田 健一 (Harada, Ken'ichi)

新潟大学・人文社会・教育科学系・教授

研究者番号：70449255

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)： 戦前期における小型映画のネットワークを確認するため、機関誌であった『パテーシネ』、ならびに戦後の後継の雑誌である『小型映画』を全冊、閲覧し必要箇所をコピーした。また、全国各地の機関に所蔵されている小型映画の調査・閲覧も行った。その映像内容はパーソナル(家族)でもマスでもない、中間的な領域(コミュニティなど)の映像が大半であることが判明した。こうした研究成果は、2015年3月、2016年3月、神戸映画資料館において公開研究会を開催し、研究発表をするとともに、このシンポジウムに参加した研究者とともに研究成果を本としてまとめることを予定している。

研究成果の概要(英文)： I made an exhaustive research on the contents of Pathe Cine and Kogata Eiga, the journals specializing in the small gauge films, in order to shed a light on the cultural network of amateur films in pre-war Japan. In addition, I visited several institutions in Japan and made investigations into the amateur films. Through the analyses of the contents, I concluded that most of the films dealt with in-between subjects. That is, they documented non-personal (non-familial), non-mass communicational, but communal topics. In March 2015 and March 2016, I organized public workshops and symposia at Kobe Planet Film Archive and presented the above-mentioned accomplishments. I and other participants have initiated preparation for publishing an anthology on the amateur film.

研究分野：映像社会学

キーワード：小型映画 中間的コミュニケーション コミュニティ・ドキュメント

## 1. 研究開始当初の背景

本研究では、マスのナショナルな物語の対極にある、市井の人々びとが記録する等身大の交わりのなかで紡ぎ出すマイクロヒストリー、「小さな歴史」を問題にする。歴史学において、「小さな歴史」に対する試みは、既に数多く行われている。しかし、映像においてそのことを問題することはほとんどない。ここでは、市井の人びと自身による映像を発掘することによって、人びとが自ら表象する世界像とそのあり方を明らかにする。

現在、マス・メディアにおいて、こうした市井の人びとの小型映画が取り扱われるのは、「大きな歴史」の補完するものとして、あるいは事件や珍しい状景が写っているものとして、当時を偲ぶ懐かしの映像として使われるにとどまっている。

この研究では、こうした映像におけるヒエラルキーを解体するにとどまらず、こうした映像を担った人びとの意図や意識、さらには自らネットワーク化し、組織化することで、「大きな歴史」対して「小さな歴史」は何を実現しようとしたのか、実証的に明らかにする。

なお、現在、映像における「大きな歴史」は、マス・メディアのなかで語られるが、そのとき、3つのフレームがある。

1つは、「中央と地方」というフレームである。日本社会には、中央一極集中型の社会構造があり、映像メディアはそうした構造を媒介し、内容もそれを反映する。そこには、中央と地方との間のヒエラルキーがあり、中心と周縁、上と下、主と従の関係性がみえる。

2つ目は、「マスとパーソナル」である。ここでもマスが中心で、パーソナルは周縁という構造がある。

3つ目は、「公的なものと私的なもの」である。マスとパーソナルとの関係に、マス・メディアは公的なものであり、パーソナル・メディアは私的なものであるというフレームが重ねられる。

そこでは、マスが上であり、パーソナルが下であるという関係性が、内容や技術的な信頼性として語られる。

市井の人々びとが記録する等身大の交わりのなかで紡ぎ出す映像のマイクロヒストリー、「小さな歴史」は、こうした構造そのものを、批判的に対象化する。また、小型映画、あるいはアマチュア映画と呼ばれたこれらの映画群のネットワークの存在は、彼ら製作者たちがこうしたメディアの構造に無自覚でなかったことを表す。人びとが紡ぎ出す微細な文化のあり方や動向をみる必要がある。あるいは、パーソナルな映像メディアが思ってもみない関係づけをし、さまざまな政治や社会、文化を生起させている場所を、調査し、明らかにしていく必要がある。本研究はそうした新たな研究の第一歩である。

## 2. 研究の目的

今まで、戦前期におけるカメラやフィルムの現像、映写機などが高額であったことから、小型映画と呼ばれる小さな映像は大きな歴史のなかで、有閑階級の楽しみと考えられてきた。また、戦後においては、カメラやフィルムの現像、映写機などの低廉化ということから、大衆化という大きな歴史で語られてきた。

しかし、こうした大きな歴史としての映像の歴史は本当だろうか。現在の急激なデジタル化のなかで、私たちは映像利用の拡大という事態によって得た利便性のなかで、見失っているものは何かを自覚する必要がある。

現在のメディア状況のなかで、かつて小型映画を制作した人びとがマスとパーソナルな映像の間をつなげようとして試みたネットワークの動きは、彼らの住み生きているコミュニティの小さな共同性から、新たな公共性を生み出そうとした運動として、再発見する価値、社会的意義を有する。

戦前期、1930年代のこうしたアマチュア・

コミュニティを1つ「メディア圏」＝「文化圏」としてみなし、映像における身体性と経済性の問題、家庭と地域のコミュニティの問題を追求したとき、映像を通したコミユナな関係性がいかに広がっていったのか、あるいは、映像メディアがいかにコミュニティの紐帯に成り得ていたかを、彼らの製作した映像、そしてネットワーキングの過程から明らかにすることができる。

また、これまで、研究領域として扱われてこなかった映像を発掘し、さらにはその映像メディアが惹起したネットワークを掘り起こすことで、それまで明らかにされてこなかった人びとの社会的無意識の存在を顕在化させ、「大きな歴史」からは見えてこなかった、市井の人びとの「小さな歴史」である世界像を明らかにする。

また、こうした世界を扱うための映像研究の方法を開発することで、映像学にとどまらない、歴史学、芸術学、美術史、社会学、文化人類学・民俗学、メディア史を横断する、人文学における新たな研究のあり方を示す。

### 3. 研究の方法

研究の第一段階として、戦前期、こうした小型映画をネットワーク化し、組織化していた、全日本パテーシネ協会を中心に扱う。その機関誌であった『ペビーシネマ』（のちに『パテーシネ』 1927～1940年刊行）を所蔵している国立国会図書館、立命館大学図書館、日本大学江古田図書館などで全冊を閲覧し、通信欄に掲載された各地域の支部情報を集積し、その活動の全容を把握する。

さらには、戦後の展開である『小型映画』（1956～1982）についても、国立国会図書館で全冊を閲覧し、適宜、関連する文章を集積する。

次に、既にこれら市井の映画が所蔵されていることが確認されている小樽市総合博物館、東京国立近代美術館フィルムセンター、宮本記念財団、神戸映画資料館、福岡市総合

図書館などで映像を閲覧しその内容を確認する作業を行い、必要に応じて、機関を連携してデジタル化の作業も行った。

さらに、東京国立近代美術館フィルムセンターに所蔵されている荻野茂二の400本のフィルムは、戦前、戦後と小型映画の中心にいた制作者として極めて重要であり、水島久光（東海大学）、北村順生（新潟大学）、榎本千賀子（新潟大学）、小河原あや（成城大学）、椋本輔（横浜国立大学）と一緒に、集中的に試写を行い、内容を検討することをおこなった。

### 4. 研究成果

荻野茂二のフィルムをもとにした議論は、2015年3月における神戸映画資料館での公開研究会にて、試写を一緒に行った研究者全員が参加し、それぞれの研究的な立場から報告し、小型映画と呼ばれる作品、世界をどう扱うべきか、あるいはどう扱うことができるのかということを議論し、通常の作品とか、作者と呼ばれるものとかかなり違った構造や問題をもっていることを明らかにした。

さらに、2016年3月における神戸映画資料館での公開研究会においては、戦前から戦後にかけて、これらの小型映画の受容層が、地域コミュニティにおいて大きな社会的な役割を担っており、また、制作する映像の内容もそうした立場を反映し、自らの家族などを撮ったものより、なんらかの市町村のコミュニティのあり方を反映したものが多いいことを明らかにした。つまり、パーソナル（家族）でもマス・コミュニケーションでもない、中間的コミュニケーションの領域を形成する、コミュニティ・ドキュメントというべき内容をもつものであった。

研究成果は2015年3月、2016年3月と小型映画を多く所蔵する神戸映画資料館において公開研究会を企画・開催し、研究発表をおこなった。また、このシンポジウムに参加した研究者とともに研究成果を本にしてまとめるこ

とを、今後、予定している。

5. 主な発表論文等  
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計3件)

1. 原田健一、「写真と映画によるコミュニティ・ドキュメントとは何か」、公開研究会「映像アーカイブと地域連携」2016年3月26日、神戸映画資料館(兵庫県神戸市長田区)

2. 原田健一、「映像アーカイブによる地域の中間のコミュニケーションの研究」第88回日本社会学会大会 一般研究報告 2015年9月19日 早稲田大学戸山キャンパス(東京都新宿区)

3. 原田健一、「映像のマイクロストリアをめぐって - 小型映画、機材の歴史と受容層」、公開研究会「イメージのサーキュレーションとアーカイブ」、2014年3月21日、神戸映画資料館(兵庫県神戸市長田区)

〔図書〕(計2件)

1. 原田健一「『海女』映像の予備調査 志摩・御宿・舳倉島を中心に」『海女文化詳細調査報告書』2016年6月 石川県(印刷中)

2. 原田健一「渋沢敬三の二つの転回点 渋沢栄一、宮本勢助・馨太郎からみた映像と民具」宮本瑞夫・佐野賢治・北村皆雄・原田健一・岡田一男・内田順子・高城玲編『甦る民俗映像 - 渋沢敬三と宮本馨太郎が撮った一九三〇年代の日本・アジア』岩波書店、2016年3月、75~94頁。

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者 原田 健一  
(Harada Kenichi)  
新潟大学・人文社会・教育科学系・教授  
研究者番号：70449255

(2) 研究分担者 なし  
( )

研究者番号：

(3) 連携研究者 なし  
( )

研究者番号：